

“ふれあうまち”のため

熊谷 博子

東京新聞 夕刊コラム『放射線』（現・『紙つぶて』） 2007年5月7日

「日本映画復興会議」奨励賞をいただいた。その翌日、偶然にも昨年同じ賞をもらった埼玉県の深谷シネマ主催で、以前つくった映画『ふれあうまち』を上映した。

深谷は中仙道の宿場町だ。古い建物が所々に残っている。深谷シネマも、もともとは商店街の閉鎖した銀行だった。そこを市が買い取り、市民のNPOが借り、改装して5年前に運営を始めた。今、大都市ではいくつものスクリーンを持つシネコンはできているが、地方の映画館は次々消えている。そんな中で、30年ぶりに復活したまちの映画館だ。ぶ厚い扉の映写室は銀行の金庫室だった。

2月に、ここで『三池 終わらない炭鉱（やま）の物語』を上映した後、観客ともども近くの旧七ツ梅酒造の建物にぞろぞろ歩いた。300年も昔から続く造り酒屋で、2年前に廃業した。約3000平方メートルの敷地に、大小12の建物。この建物を活かそうと、中を使い、虫をテーマにした現代アートの展示もやっていた。玄関脇の畳の部屋に皆で座り、ああだこうだと議論をするのは不思議な気分であった。過去と現代が融合した新しい空間が酒の代わりに生まれていた。

今回の上映は、ここの酒蔵に映写機とスクリーンを置き、椅子を並べた。映画が東京と独ハンブルクの下町を舞台に、住む人々が古いものを壊さずにどう活かしてまちを育てていけるのか、を描いているからだ。酒蔵の冷気の中で再び、この建物をどう残し市民のものとして活かしていけるのかを、話し合った。

人々の生きてきた営みを触り、息づかいを聞ける場所を壊してしまったら二度と元には戻らない。